

# 国際的な視野をもち、円滑にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成

池本源二郎[鹿児島大学教育学部附属中学校]・山内 誠[鹿児島大学教育学部附属中学校]  
入江将紀[鹿児島大学教育学部附属中学校]・有島 玲奈子[鹿児島大学教育学部附属中学校]

## A study for improving students' communication skills

IKEMOTO Genjiro · YAMAUCHI Makoto · IRIE Masanori · ARISHIMA Renako

キーワード：協働、小中連携、ICT、グローバル、ジグソー学習

### 1 緒言

本研究は、本校英語科における学力の向上を目指した研究であり、将来のグローバル化社会で活躍する人材の育成につながることをねらいとした実践的研究である。昨年度は、創造的に考える言語活動を効果的に取り入れ、一定の成果が見られた。しかし、個による高まりに差が多かったり、ペアやグループによる複数の学習者による活動において、役割と責任をもって全員が活動できていなかったりするという現状があることが分かった。そこで今年度は、これまで行ってきた複数の学習者による言語活動の在り方を見直し、工夫改善を図っていく必要があると考え、本研究を行うこととした。

### 2 研究主題

国際的な視野をもち、円滑にコミュニケーションを図ろうとする生徒の育成

### 3 研究主題並びに仮説設定について

#### (1) 社会の要請から

現在の知識基盤社会やグローバル化社会においては、アイデアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争が激化する一方で、異なる文化や文明との共存や国際協力がますます必要とされている。また、PISA調査を行っている経済協力開発機構(OECD)は、これからの世代が身に付けるべき主要能力(Key Competencies)として①社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用できる能力、②多様な社会グループにおける人間関係の形成能力、③自律的に活動する能力の三つを挙げ

ている。この三つの能力を基にした新しい学力観を踏まえるならば、現在の日本の英語教育に必要なことは、生涯にわたって主体的かつ協働的に学び続ける「自律した学習者」を育成することである。

また、2010年6月に閣議決定された「新成長戦略」では、「子ども同士が教え合い、学び合う『協働教育』の実現」が盛り込まれた。文部科学省も、2011年4月に発表した「教育の情報化ビジョン」で、一斉学習や個別学習に加えて、「21世紀にふさわしい学び」として「子どもたち同士が教え合い、学び合う協働的な学び(協働学習)を推進すること」を明記した。その中で、「情報端末や提示機器等を活用し、教室内の授業で子どもたち同士が互いの考え方の共有や吟味を行いつつ、意見交換や発表を行うことや、学校外・海外との交流授業を通じて、互いを高め合う学びを進めること」が具体例として挙げられており、情報機器の効果的な活用による協働的な活動が重要になってきていると言える。

これらのことから、本校英語科では、言語活動に協働の視点を取り入れたり、ICTを効果的に活用した学校外や海外との交流を積極的に行ったりすることでコミュニケーション能力が高まると考えた。

#### (2) 生徒の実態から

本校の生徒は比較的学習意欲は高く、言語活動においても積極的に活動に取り組んでおり、基礎的な学力は育まれていると言える。しかし、

コミュニケーションの対象となる相手が本当に伝えたい意向を聞き取ったり、手紙などの英文から書き手の意向を正確に捉えたりして、その内容に適切に応じるための指導の在り方においてはまだ改善の余地があることがわかった。

また、授業の様子を見てみると、(1)の課題でも述べたような姿が見られる。例えば、2年生でのスキット作りの活動において、授業後の生徒のワークシートの中から次のような表現が見られた。

生徒の作成したスキット原稿

- A : You went to Australia last week. Did you enjoy your trip?  
 B : ①Yes, I did.  
 A : That's nice. Where do you want to go next?  
 B : I want to go to New Zealand.  
 A : Oh, I see.

スキットを作る際には、生徒が下線部①のような、Yes./No. の答えのみで済ませずに実際のコミュニケーション場面を想定した内容、例えば、'Yes, I did.' のあとに 'I watched operas and plays in Sydney.' のような相手が知りたいと考えられる内容、つまりオーストラリアの旅行の様子を具体的に伝えるセリフが含まれるようなスキットになることを目指したいと考えた。また、3年生のUnit3 Fair Trade Chocolate の授業の中で行った意見交換の中で、次のようなやり取りが行われた。

意見交換の一部

- A : Which chocolate do you want to buy?  
 B : I think we should buy fair trade chocolate.  
 A : Why?  
 B : ②Because we can help many people. How about you?  
 A : I want to buy normal chocolate because I don't have much money.

下線部②に入るフェアトレードチョコレートを買う理由については「人のためになる」という漠然とした答えを書いている。しかし、フェアトレード制度のことについてより多くの知識をもっていれば、具体例等を含めたよ

り説得力のある理由が述べられ、意見交換が更に活発になることが期待できる。このことから、英語科で学習した内容だけでなく、他教科での学習内容や他者がもっている知識・技能を組み合わせることで理解・表現する言語活動を多く取り入れていく必要があると考えた。これらの実態から、本校英語科では、英語による基本的な応答の形は身に付いているが、相手の意向を理解したり、他単元で学習した内容や、互いが身に付けてきた知識・技能を活用したりするような、より実際の場面におけるコミュニケーション能力が身に付いているとは言い難い。

また、平成25年度より、本校と台北市立大直高級中学との交流を行うこととなった。よって生徒は、学んだ英語を用いて、実際に国を超えてコミュニケーションを行う機会をもつことが可能となる。この交流を通して、生徒には「学んだ英語が使えた」という自己効力感や、「使うために英語を学ぶ」といった実践的な意欲を感じさせられるのではないかと期待できる。さらに、交流を行う際には、機会を設けて実際に対面するだけでなく、普段の授業からICTを用いて、情報の交換や情報の共有などを行い、コミュニケーション場面の充実や異文化理解を促進させていく必要があると考える。

これまで述べてきたことから、昨年度まで行ってきた実践的な言語活動に協働の視点を取り入れ、生徒一人一人が互いに認め合い、協力しながら個性を発揮したり、責任感を感じさせたりする言語活動に意欲的に取り組めるようにしたいと考えた。その上で、生徒それぞれが互いの知識・技能を認め合い、補い合ったり、組み合わせたりしながら、よりよく英語を理解し、よりよく英語で表現できるように指導を工夫していきたい。また、その際に扱う教材については、書き手や話し手の意向や心情の他に、既習事項を活用しなければ解決できない課題を教材の中によりよく設定したい。加えて、単に教材そのものと向き

合うだけでなく、その書き手や話し手の性格や背景を理解した上で教材に取り組めるような工夫も必要だと考えた。

そうすることで、「国際的な視野をもち、円滑にコミュニケーションを図ろうとする」生徒を育成したいと考えた。

#### 4 研究の構想

##### (1) 円滑なコミュニケーション能力の高まりについて

本校英語科において目指す円滑なコミュニケーション能力とは、学習指導要領におけるコミュニケーション能力、つまり「聞くこと」「話すこと」「読むこと」及び「書くこと」の4技能を統合的に活用できる能力に、鹿大附属中(2012)の全体緒論で述べられている「創造的に考える力」、「創造的に考えようとする態度」を踏まえたものとして次のように捉え、研究を行った。

###### 円滑なコミュニケーション能力

###### ア 円滑にコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力

- ・ 身に付けた知識・技能が実際のコミュニケーション場面においてどのように活用できるか考える力
- ・ まとまりのある文章を通して、自分の考えを相手によりよく伝えたり、相手の考えをよりよく理解したりする力

###### イ 円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度

- ・ 授業や実際のコミュニケーションに好奇心をもって自分から積極的に取り組む態度
- ・ 身に付けた力を実感し、失敗を恐れず、自信をもって実際のコミュニケーションに取り組むことができる態度

本年度、本校英語科では、先述した社会情勢や本校の実態を踏まえ、上記の円滑なコミュニケーションの能力の更なる高まりを目指したいと考えた。

佐藤学(2001)は、「子どもたちの学び合う関わりが、教師の5倍以上の力を発揮する」と述べていることから、ペアやグループの活動が生徒の円滑なコミュニケーション能力を高めるために有効であるということが考えら

れる。そして本年度は、昨年度までの課題を踏まえ、真に生徒が「学び合う」ことができるように、生徒が互いに認め合い、協力しながら個性を発揮したり、責任感を感じたりしながら言語活動に取り組めるような工夫を行う必要があると考えた。

しかし、単に生徒が意欲的に言語活動に取り組めば、円滑なコミュニケーションの高まりを見ることができないわけではない。実際のコミュニケーション場面では、互いに違う性格、違う背景をもった人間同士が、心情を察し、互いの知識を共有し、状況に応じて適切な表現・理解を双方向に行うものである。そこで本校英語科においても、様々なコミュニケーション場面において、互いの意見を尊重・理解させ合ったり、互いの意見やその他の知識、情報を組み合わせたり、補い合わせたりさせる言語活動の設定が求められる。また扱う教材についても、書き手や話し手の意向や、それぞれの背景、その場の状況等を加味しなければ、適切な理解や表現ができないような内容で、生徒に言語活動に取り組ませる工夫を行う必要がある。

これらの言語活動の設定や指導の工夫を行えば、円滑なコミュニケーション能力の高まりが期待できると考えた。ここで、本年度の研究において目指す円滑なコミュニケーション能力の高まりについて、下記のように定義する。

###### ア 円滑にコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力の高まりについて

円滑なコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力が高まった状態とは、これまで個人で身に付けてきた英語の学習内容だけではなく、ペアやグループなどの複数の学習者において、互いの知識・技能を共有したり、組み合わせたりしてよりよく表現・理解し合っている様子のことを指す。またそのためには、不明な点を相手に質問したり、相手にうまく伝わらないときは、別の表現を用いたりするなどして互いに分かり合おうとすることも求められている。

例えば、ALTからの手紙に対する返事を書くようにする際に、複数の学習者による協働の視点をもった言語活動が充実することで、他者からの異なる考えや意見が加わり、手紙文の文脈や行間の中からALTが伝えたい意向を推測したり、分かりやすく伝えたりしやすくなる。その結果、手紙を書いたALTが本当に納得できるような適切な返事を書くことができ、円滑にコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力を高めることができると考えた。

## イ 円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度の高まりについて

円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度の高まりとは、ペアやグループなどの複数の学習者間でコミュニケーションを図る際に、失敗を恐れずに自分から積極的に関わっていきこうとするだけでなく、互いが協力し合ったり、相手の考えや意見に耳を傾けて、互いを認め合ったり、責任感をもって与えられた自分の役割を果たしたりしている状態を指す。例えば、ALTからの手紙に対する返事を書くようにする際に、グループのメンバーの考えや意見を頭ごなしに否定や批判をせず、十分に理解しようとした上で、それぞれの意見を尊重し、全員の意見が必ず含まれるような内容の返事を書くようにする態度のことである。これらの態度が高まることで、円滑にコミュニケーションを図ろうとする態度が高まると考えている。

## (2) 協働的な言語活動について

本校英語科で、これまで実践してきた円滑なコミュニケーション能力を高めるための言語活動は、主に個人に焦点を当てたものであった。もちろん、これまでもペアやグループによる活動を行ってきたが、活動の様子を見ると、活発に発言するメンバーに限られており、グループ内で十分な議論がなされず、人間関係に影響力があつたり、英語が得意だったりする生徒一人の意見をそのままグループ全体の意見としたりすることがあった。そのため円滑なコミュニケーション能力の高まりにも個人差が見られた。そこで、グループによる複

数の学習者間の活動においては、必ず役割をメンバー全員に与え、自分の役割を果たさないとタスクが解決できないような場面を作り出し、互いに認め合い、協力しながら責任感をもって情報を持ち帰り、その後の議論でその情報や既有的知識等を互いに組み合わせたり、補い合ったりする機会を多くもたせたいと考えた。このように、これまで行ってきた創造的に考える力や態度を高めるための言語活動を個人だけで行うのではなく、複数の学習者間に広げて、建設的に支え合ったり、互いに認め合ったりしながら学びを深め、共に高め合うことができるような「協働的な言語活動」を充実させることで、更に円滑なコミュニケーション能力の向上につながると考えた。

## (3) 協働的な言語活動を充実させるために

本校英語科では、協働的な言語活動を充実させるために欠かせないのが全体緒論で述べている「知的コミュニケーション」であると考えている。本校英語科における知的コミュニケーションとは、互いがもっている考えや意見の共通点や相違点を見出し、ひとつの合意点を探るためのコミュニケーションである。それは、単なる情報や互いの気持ちを伝達し合うコミュニケーションではなく、個人で生み出した異なる考えや意見から、よりよい考えや意見を創り出すための建設的な学び合いを目指している。そのために、協働的な言語活動においては、知的コミュニケーションを行わせ、よりよい合意点を探らせるような指導の工夫が必要となる。しかし、英語を用いて互いの合意点を探るといふ活動は、決して全ての生徒が初めから取り組むことができる活動ではないということは容易に推察できる。江利川(2012)は、「母語による思考力と英語による表現力とは大きく乖離しています。ですから英語のトレーニングではペアやグループでの英語使用を促し、仲間同士の話し合いでは日本語の使用も認めましょう」と英語の授業の中で日本語を用いることを許容している。このことから、本校英語科における知的コミュニケーションでは、必要に応じて日本語による議論も認めている。例えば、互いの意見を出し合い、新しい考えや意見を生み出す過程において、日本語を

効果的に活用することで、互いの考えや意見に対する理解がより深まり、英語が苦手だと感じている生徒にとっても自分の主張を取り組みやすい活動となると考えた。

上述したように、知的コミュニケーションが活性化すれば、協働的な言語活動はより充実し、円滑なコミュニケーション能力の高まりが期待できる。

#### (4) 知的コミュニケーションを活性化させるために

三浦(2002)は、積極的にコミュニケーションを図ろうとする際に必要なことの一つとして「良い聞き手作り」を挙げている。そこで本校英語科では、知的コミュニケーションを活性化させるために、相手の意見や考えを推測したり、質問したりしながら、話し手や書き手の意向を深く理解しようとするのが重要であると考えている。また、自分がこれまで身に付けた知識・技能を基にした考えや意見が相手にうまく伝わらないときは、別の易しい表現に言い換えたり、具体例を挙げたりして表現することも必要であると考えた。このような「相手意識」をもつことが知的コミュニケーションを活性化させる上で必要であると考えた。例えば、互いの主張を理解し合うために、相手に話しやすいように相づちをうったり、不明な点はそのままとせず、予測して聞き返したり、相手が分かりやすい例で例えたりすることが挙げられる。また、質問したことが相手に理解できなかったり、コミュニケーションがうまく続かなかったりする時は、WH Question からより答えやすい Yes./No. Question に代えたりするなどの工夫も考えられる。

このように、生徒に「相手意識」をもたせることで、考えや意見の共有や合意形成の際に、相手が伝えたい意向を推測したり、不明な点を質問したり、互いが伝えたいことを分かりやすく言い換えたりすることを促し、知的コミュニケーションの活性化につながると考えた。

## 5 研究の重点

- (1) 円滑にコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力を育むための工夫

ア 協働的な言語活動を充実させるための工夫

- (7) ジグソー学習  
(4) チームリーダーの育成

イ 知的コミュニケーションを活性化させるための工夫

- (7) 「相手意識」を高めるための課題文作成の工夫  
(4) 「要約」のための言語活動の工夫

## 6 研究の内容

### (1) 円滑なコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力を育むための工夫

#### ア 協働的な言語活動を充実させるための工夫

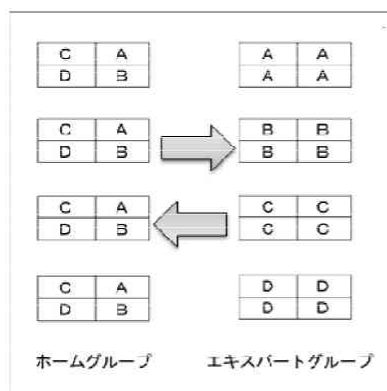
杉江(2011)は、小集団による学習について、「少人数集団で自分と仲間の学びを最大限に高め合い、全員の学力と人間関係力を育て合う教育の原理と方法である」と述べている。このことから、協働的な言語活動を授業の中に取り入れることで、全員でよりよい考えや意見を創り出すことにつながり、円滑にコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力の高まりにつながると考えた。そして、協働的な言語活動を充実させるためには、他者とできるだけ活発に知的コミュニケーションを図る機会を増やすことが大切である。

そのために本校英語科では、協働的な言語活動の充実を図るためにジグソー学習の手法を取り入れて研究を行った。

#### (7) ジグソー学習

ジグソー学習は、アメリカの社会心理学者であるエリオット・アロンソン(1994)が開発した学習法であり、本校英語科では、この学習法を参考に、協働的な言語活動の一つとして位置付けて研究を行った。基本的な流れとしては、図1のようにまず、ホームグループで与えられた課題の解決に向けたA～Dの役割を決め、それぞれが同じ役割をもったエキスパートグループに移動し

て責任をもって情報を集め、その情報をホームグループにもち帰る。そして、それらの情報を組み合わせてそれぞれのメンバーの合意を基に一つの結論を出す。このように、ジグソー学習の手法を取り入れることで、生徒一人一人が活動に対する自らの役割と責任を自覚させたいと考えた。その上で、生徒に互いの知識・技能を基に、各グループで協働的に関わらせ、よりよいアイデアを練り上げることができるようさせたい。



【図1 ジグソー学習における学習形態】

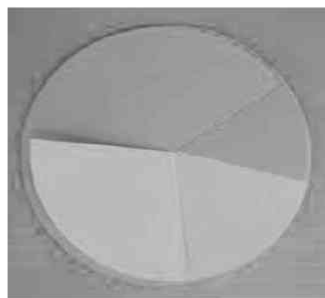
また、ホームグループにおける合意点を探るための話し合いを活性化させるための手立てとして図2の「コンセンサスサークル」の活用が効果的であると考えた。これを用いることで、個人の考えや意見がグループにどのように反映されているかを可視化することができる。また、活動の様子を俯瞰し、進捗状況を客観的に把握することもできる。さらに、チームリーダーが合意点を決定する際に、少数意見が十分に反映され、積極的にメンバーに質問や確認をしながら意見を引き出させる効果もある。

コンセンサスサークルの具体的な活用方法は以下の通りである。

- 1 エキスパートグループで確認したメンバーのキーワードを色別に分類し、それらを一つの円に組み合わせる。コンセンサスサークルの各色が均等に分けられている状態からスタートし、他の考えや意見に対する質問や自分の主張の補足な

どにより議論が進むにつれて、コンセンサスサークルの各色の割合を変えながら一つの合意点を探る。

- 2 基本的には、コンセンサスサークルを動かすのは、メンバーの合意の基にリーダーが行う。
- 3 リーダーは、サークルの割合が小さくなった意見をもつメンバーにも発言する機会を作るため、質問したり再度主張させたりして意見を引き出し、少数派の考えや意見も大切にす。
- 4 他のグループのサークルと比較して、様々な視点から合意点を探ることも有効である。



【図2 コンセンサスサークル】

以上のようなジグソー学習を通して、複数回の発散・収束を繰り返すことで知的コミュニケーションの機会を多く取り入れることができ、よりよい考えや意見が創り出される。エキスパートグループでの活動では、友人との知的コミュニケーションを通して、英語がやや苦手な生徒でも、共に学び合える場を設定することで意欲的に取り組むことができる。また、その後のホームグループの活動に必要な知識を確実にもち帰る必要があるため、生徒一人一人に責任感も生まれる。その際、エキスパートグループからもちよった異質で多様な知識を基に、合意点を探りながら、一人では考えつかないようなよりよい考えや意見を創り出すことが期待される。

これらのことにより、協働的な言語活動を充実させるために、ジグソー学習を取り入れることで、互いの考えをよりよく理解したり、表現したりすることができるようになり、円滑にコミュニケーションを図る



ために必要な表現力・理解力を育成できると考えた。

ンを図るために必要な表現力・理解力を育成できると考えた。

(イ) チームリーダーの育成

上記のジグソー学習を行う上で欠かせないのが「チームリーダー」の育成である。これまで行ってきたグループ活動でのリーダーとは異なり、本校英語科におけるチームリーダーに期待する役割として特に身に付けさせたいことを、以下のように定めた。

【表1 英語科におけるチームリーダーに期待する役割】

役割	内容
活動のコントロール	<ul style="list-style-type: none"> <li>活動の見通しを立てる(時間・目標)。</li> <li>メンバー全員の役割を明確にする。</li> </ul>
環境づくり	<ul style="list-style-type: none"> <li>メンバー全員が気軽に発言しやすい雰囲気を作る。</li> <li>発言されたメンバーの意見が、グループにうまく反映されるような雰囲気を作る。</li> </ul>
メンバー支援	<ul style="list-style-type: none"> <li>よりよい考えや意見になるように、できるだけ答えを言わずに、ヒントを与えたりメンバーの視点を変えさせたりする。</li> </ul>
進捗管理	<ul style="list-style-type: none"> <li>知的コミュニケーション活動の全体を俯瞰し、その後の方向性を確認したり、進捗状況を把握したりする。</li> </ul>

しかしながら、チームリーダーは、ある特定の生徒のみが行うわけではなく、授業によって変わり、全員がチームリーダーとしての活動を、自主的に進めていけるようになることを目指す。また、チームリーダーは教師に活動の進み具合を連絡・報告したり、新たなヒントをもらったりするが、メンバーがチームリーダーに依存するわけではなく、メンバー全員に責任感と役割をもたせて活動させることが必要不可欠となる。

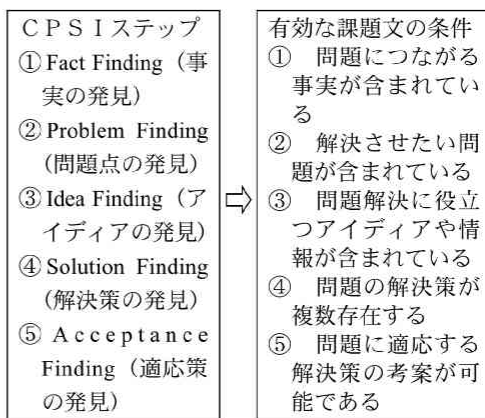
このような状況の基に、生徒同士が個人で身に付けた知識・技能を互いに活用しながら、互いの考えをよりよく理解し、それを基に自分たちの考えを相手によりよく伝えることができるようになり、円滑にコミュニケーション

イ 知的コミュニケーションを活性化させるための工夫

先述したように、本校英語科では、知的コミュニケーションを活性化させることで、協働的な言語活動が充実し、円滑なコミュニケーション能力が高まると考えている。そして、知的コミュニケーションを活性化させるためには、「相手意識」を高める必要があると考え、以下のような取組を行った。

(7) 「相手意識」を高めるための課題文作成の工夫

鹿大附属中(2012)では、生徒にコミュニケーション活動を行わせる際に、生徒の思考力・判断力を活性化させるために、生徒に試行錯誤をさせるような情報を与えたり、相手の意向や、その場の状況を基にした表現活動を行わせたりすることが有効であるということが分かった。今年度は、このような「最適な制約」を与えた言語活動を行わせる上で欠かせない課題文の作成について



【図3 CPSIステップを活用した課題文作成】

での研究を深め、そのような課題文を活用した言語活動を通して、より「相手意識」が高まると考えた。なお、課題文を作成する際には、創造教育財団が問題解決のステップとして提案する図3のようなCPSIス

テップに基づくことが有効であると考え、参考にした。

図3のようなCPSIステップを取り入れた課題文を活用することで、生徒が試行錯誤しながら、互いの考えや意見からよりよいアイデアを創り出そうとして知的コミュニケーションが活性化し、協働的な言語活動の充実につながると考えた。

このように、グループのメンバーとの間で相手の意向やその理由等を議論する機会を増やすことで、「相手意識」の高まりにつながり、知的コミュニケーションが活性化される。

#### (イ) 「要約」のための言語活動の工夫

相手を意識したコミュニケーションを行うためには、生徒自身やコミュニケーションの対象となる相手も持っている知識や情報等を「要約」し、表現と結びつける必要がある。この「要約」とは、単に内容を短くまとめるということではない。メンバー同士の知的コミュニケーションの中で多様な意見に耳を傾けながら、重要と思われるものを取捨選択したり、自分の知識・技能・経験等を基に例えたり、言い換えたりして分かりやすく表現することである。

そのためには、日頃の授業から与えられた知識や情報を再構成し、それを基に表現させる活動を繰り返し行う必要がある。本校英語科ではAWajnyb (1989) により提唱されたディクトグロスという手法を参考に、生徒の学習の段階に応じて以下のような活動が有効だと考えた。

- |     |   |
|-----|---|
| 活動1 | ・ リスニングで聞き取った内容のキーワードをメモして、そのキーワードをもとにペアで聞き取った内容を口頭で復元し合う活動。  |
| 活動2 | ・ 本文の内容理解の際に、教師のオーラルインタラクションにより生徒から引き出したキーワードを構造化された図として板書し、その構造化された情報をもとに内容を英語で再構成し、ペアで生徒同士が互いに内容を確認し合う活動。 |

- |     |  |
|-----|--|
| 活動3 | ・ ペアで読みだり聞いたりして得た内容を、協力しながら図や表を用いてノートに構造化させ、構造化されたものを基にその内容を別の生徒に伝える活動 |
|-----|--|

このような工夫を通して、ペアやグループなどの複数の学習者間によるそれぞれの知識・技能を互いに活用させながら、それらを再構成し、自分たちの考えを相手によりよく伝えることができるようになれば、「相手意識」の高まりにつながり、知的コミュニケーションが活性化される。

上記の(7)、(イ)の工夫を行うことで、知的コミュニケーションが活性化され、協働的な言語活動が充実し、円滑なコミュニケーションを図るために必要な表現力・理解力を高めることができると考えた。

## 7 研究の成果と課題

### (1) 成果

- |  |
|--|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 協働的な言語活動を取り入れることで、グループ活動の質が高まり、メンバー全員の責任感・達成感の高まりにつながった。</li> <li>・ CPSIステップに基づいて作成した課題文等の題材を用いることで、生徒が互いの意見の相違に対して質問したり、同意したりするなどの試行錯誤を繰り返し、活発なコミュニケーション場面が多く見られた。</li> <li>・ ICT活用の工夫を行うことで、好奇心をもって自分から積極的にコミュニケーションに関わろうとする態度が高まり、海外提携校との交流を強く意識させることにつながった。</li> <li>・ 小学校外国語活動との接続を意識した言語活動の工夫により、失敗を恐れずに、自信をもって他者と協力しながら言語活動に取り組むことができた。</li> </ul> |
|--|

### (2) 課題

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 今後は、更にグループによる協働的な活動が充実するような題材の開発を進めていく必要がある。</li> <li>・ ICTの活用を更に発展させて、実際に海外提携校との交流につながるような取組を推進していきたい。</li> <li>・ 小学校外国語活動との接続については、</li> </ul> |
|---|



実際に中学校の教員が附属小学校で授業に参加するなど、更に交流・連携を深めていきたい。

- ・ グループによる高まりから、個人の寛容を確実に見取るための評価の在り方についての研究を更に深めていく必要がある。

## 8 終わりに

今年度は、学校全体として協働的な活動に焦点をあて、これまで行ってきた個による学習活動から、ペアやグループでの複数の学習者による活動の工夫を行うための研究・実践を積み重ねてきた。その中で進むべき方向性は間違っていないことが分かった。しかし、今後に向けての課題も見えてきた。それは、グループにおける活動を活性化させるためにチームリーダーの育成が欠かせないという点である。このことについては今後も継続して研究を重ねていくことで、特活や道徳などの他領域においての学習活動においても生かすことができると信じている。また、グループにおいて生徒全員が意欲的に活動に取り組めるような学習課題につながる題材の開発を本校英語科がまさに最高のチームとして取り組んでいければと考えている。

### (参考文献)

- ・ 伊東治己編著(2008)『アウトプット重視の英語授業』教育出版
- ・ 江利川春雄編著(2012)『協同学習を取り入れた英語授業のすすめ』大修館
- ・ 江利川春雄編著(2009)『英語教育のポリテイクス～競争から協同へ～』三友社
- ・ 影浦攻(1996)『新学力観に立つ英語科の授業改善』明治図書
- ・ 松村昌紀著(2012)『タスクを活用した英語授業のデザイン』大修館書店
- ・ 三浦孝・弘山貞夫・中島洋一著(2002)『だから英語は教育なんだ』研究社
- ・ 三浦孝・中島洋一・池岡慎著(2006)『ヒューマンな英語授業がしたい』研究社
- ・ 文部科学省(2008)『中学校学習指導要領解説 外国語編』開隆堂
- ・ 文部科学省(2008)『小学校学習指導要領解説

外国語活動編』東洋館出版社

- ・ 文部科学省大臣官房国際課(2012)「グローバル人材育成への取り組み」『英語教育』第61巻第9号10-13頁 大修館書店
- ・ 弓野憲一(2005)『世界の創造性教育』ナカニシヤ出版
- ・ 渡邊将志編著(2007)『論理力より創造力』講談社
- ・ Wajnryb, R. (1990). 『Grammar Dictation.5.』 Oxford: Oxford University Press.